

週 報

「信じます。

不信仰なわたしを、
お助けください」。

(マルコによる福音書第9章24節)



人と神、人と人をつなぐ難しい働きをしています
日本基督教団 西宮公会堂

〒662-0834

兵庫県西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691

FAX 0798-63-4044

郵便振替 01170-3-4901

ホームページアドレス

<http://www.koudou.jp/>

電子メールアドレス

koudou@gamma.ocn.ne.jp

小さな手大きな手

(前週よりのつづき)

そんな時、浮かんだ考えが、聖母子像の前で自分の曲芸をすることでした。

それは修道院で修道士たちが「詩編の祈りや賛歌を歌ってお祈りをする」本来の働きと何の関わりもありません。でも、バーナビーの「…ぼくにできるのはあなたのために、最高の芸をお見せすることなんです。ぼくが跳ねるのは子牛が母牛の前で喜んで跳ねるのと同じです。どんなことをしても、それはみんな、あなたに喜んでいただきたいからです」は、「あなたに喜んでいただきたい」「あなた」に届かないはずはない「私の、今」なのです。

そんな「私のいま」を、淡々とゆっくり、ゆるやかに語ってもらったのが、1月25日の教会の礼拝に来ていただいた、沖縄県、名護教会の牧師の羽柴禎さんでした。なかなか抜けられないところを、工面していただいて、願いをかなえて下さり、西宮公会堂の礼拝説教を引き受けて下さいました。

その「ゆっくり、ゆるやか」に語っていただいたのは、2年程前に体調を崩し、名護教会の礼拝で話せなくなった、その時の様子を、「淡々と、ゆっくり、ゆるやかに」話していただいた、その話が集まって聞いていた人たちにとって、例外なくほっとする時間になりました。

「ああ、こんな礼拝の『説教もあっていいのだ』と、率直に思わせていただく、そんな時間だったのです。それは「説教」という基本的には決まった形の決まった内容・結論になる「いわゆる説教」というより、ありのままの「私の今」が、説教であり得ることに気付かされ、納得できる、そんな内容の時間でもあったのです。

話は飛躍するかも知れませんが、「ちいさな曲芸師

バーナビー」が、修道院の修道士たちの働きを間近に見て、自分は何一つそれらしい事ができない、そのことで「生まれてこなければよかった」とさえ思ってしまった時「…でも、ミサの始まりを告げる鐘の音が聞こえたとき、ある考えが浮かびました。彼はうれしくて跳びあがりました」という「ある考え」は「…やってみましようか？それならできるんです。ぼくにできるたったひとつのことを、このチャペルで、マリアさまと赤ちゃんのイエスさまだけのためにやります。ほかの修道士たちが、詩編の祈りや賛歌を歌ってお祈りをするかわりに、ぼくが宙返りをお見せします」。

「…ぼくにできるのは、あなたのために、最高の芸をお見せすること」「…それはみんな、あなたに喜んでいただきたいからです」は、「私のいま」の、今の私をありのままを見せる、ないし語ることは、十分に説教であり得るように思えました。

羽柴さんの話、バーバラ・クーニーの「ちいさな曲芸師 バーナビー」から示唆を受け、西宮公会堂の説教のもう一つの表題は、近いうちに「私のいま、世界のいま」になるはずです。

